



凡夫の独り言



はじめに

本を読むことが嫌いだった私でしたが、学生の頃にふとしたきっかけで五木寛之の「青春の門」を読んでから、還暦が目前の凡夫ですがこの歳まで五木寛之の作品を読み続けています。

なぜにこのように40年もの間読み続けられたのかという問いに対しては、一言で答えるとすれば、モーツァルトの音楽のように音符の代わりに文章が澁みもなく流れていることに尽きます。

難しい表現がなく、常に易しい言葉で語りかけ確実に伝えたい心が伝わってくる作家だと思っています。

ここでは、過去に読んだ本の中で気に入った言葉に関して、凡夫のその時の思いを書き綴りました。凡夫にとってはモーツァルトと五木寛之に出会う事が無ければ異なった人生を歩んでいたと思います。

五木寛之によって仏教にも導かれ今では時間があれば寺巡りをしながら仏像と対峙し、自分を見つめ直す日々を過ごしています。

五木寛之は、私にとって個人的な師であります。

人生について

人生における希望や価値について自分自身に問うことは人生の節目毎にあると思います。これは常に生じる事ではなく、卒業、就職、結婚、出産、退職、死別のような事象を境に新しい一歩を踏み出す場合に起こる事なのです。

自分自身の場合を振り返って見ると、大学を卒業し就職した時に、自分の能力の無さや生きるための明確な支えが無く、同期入社した者に対する劣等感で憂鬱な時期を過ごした事がありました。いくら同期の者も同じ人間だと思ってみても、頭の中では彼らの学歴（東大を始めとする国立大学や早稲田・慶応という一流私立大学卒がほとんどの中で二流の私学を卒業し、かつ勉強も適当にしかしなかった自分に対して今更ながら情けなさを味わうとともに、当時は恐ろしいとの思いがつのったものでした）を気にしてしまう自分がいました。

この状況の中で自分が取った行動は、できるところまでやるしかないと言う一種の開き直りでした。開き直りの行動の中から、何らかの光が見えてくるのではないかと勝手に思い、実行して来た結果が今の自分なのだと思います。いまでも間違った方法でないと思っているのは、実際に色々な場面に遭遇しながら、この方法で切り抜けてこられたと言う自負があるからです。

しかし、この陰には当然ながら周りの人に助けられた事実があったことは忘れてはいません。だから人間は周りの人を大切にしなければならないと今でも感じているのです。

五木の言葉の中に「人間、誰にも1回は必ずくる。」とありますが、凡夫には数えきれないほど「人生に希望はあるのか」「人生に価値はあるのか」を考えて続けてきています。これが凡人なのだとつくづく思います。

凡人は色々な面でこのように悩み苦しむから必然的に人間の幅が広がり少しずつ成長するものだと思います。そしてどうにか最後に一丁前の人間になり人生の幕を降ろすのだと思っています。

一回も考えた事がない人が仮にいたら、それは既に自分の哲学を持ち合わせている素晴らしい人であると言えますが、個人的には反対に不幸せなことだと考えます。何故ならば悩んだり苦しんだりする過程を通して人間は成長し、そして変わるものだと思います。

何の苦勞も悩みも無く歳をとって行く人には、人間としての魅力は感じられません。弱い面があるから本当の強さが分かりそして強くなれるのだと思います。

仕事と恋愛に対する取り組み方は全く同じです。働くことを通じて自分の力が分かり、どのよ

うに世の中で生きて行けばよいのか分かります。そして恋愛することにより人間としての幅が広がるのです。

そして相手の気持ちになって考える事が出来るようになると共に、人間に対する思いやりや反対に裏切り、さらに嫉妬や喜びや悲しみなど喜怒哀楽を学ぶことができるのです。

そして食べることは人間の欲求であり稼いだ金で好きな相手と食事が出来るなんて最高だと思います。そして女とやる。これも人間の欲求であり、男は女によって成長するものだと今でも思っています。

何事も経験が重要なのです。好きであればとことん行なえば良いのであり、中途半端が一番いけないことなのです。中途半端なら始めからしない方が良いと思います。

どのような名声がある人間でもまた優秀な人間でも、さらに私のような凡人であっても人間には代わりないし、働いて稼ぎ、食って、女とやるなんて事は全て共通のことであり人間を比べることなく、ましてや自分を卑下するものでないことが分かれば青春時代は卒業だと思います。

しかし人生を振りかえって、この青春時代が最も輝いていると思われるのは、全て全力投球で取り組んで来たからだと思います。今からでも遅くない。若者ならば思いっきり、また少し歳を取ってしまったと思われる方はそこそこに頑張って自分の人生を送ることが大切だと思います。

人生を生きる際に、暴走と見える走り方も中にはあると思います。しかしたくさんの人間が自分と同じようにチャレンジしながら前に進むことにより、それはそれで一つの道になって行くものです。

「そうだなあ。やるっきゃないなあって・・・」人間ってほんのちょっとしたことで傷ついたりまた、死ぬほど頑張ったりする動物だと思っています。後になって思い返してみると、自分はなんて馬鹿な事をしたのかとか、本当にこんな凄い事が出来てしまったのだなあとか・・・良く言われるように誰にでも可能性や能力を持っているのだけれども、当人が腰を据えて本気に実行しないから最後で結果が大きく異なるものだと思います。

昔、苦しくなった時によく「やるっきゃない」と言葉にだして自分自身を叱咤激励していた頃を思い出しました。誰も取り組まなかったことにチャレンジするとか、無茶だと思うようなことでも行動しなければならぬときには、たとえ独りであっても実行に移すべきなのです。

行動した後は、必ず何らかの結果があるので底から新しい道が開かれるものだと思います。若い時こそ暴走することができるのだと思います。

昔の上司でこれと同じような事を言われた方がいました。その方は「仕事以外の分野である事に対して2万時間を費やせばその道のプロになれる」と常に言われていました。2万時間の根拠は分かりませんが、例えば一日3時間毎日そのことに時間を費やすと2万時間は18年と3ヶ月を必要とします。考えただけでも気が遠くなりますが、感覚的に2万時間の重さの意味が分かるような気がします。

私にとって仕事以外に打込んだものといえば、中学の頃から聴きだしたクラシック音楽です。仮に1週間に10時間聴いたことにすると、現在まで優に2万時間は聴いたことになります。確かにこの歳になって人が何を言おうと、音楽に関して良し悪しが言えるような耳を持ったような気がしています。2万時間って以外と当たっている数字なのかもしれません。

この他には文章を書くことしか私にはありません。あともう一つほど死ぬ前までに達成してみたいと思いますが残された時間は限られているので有効に使わないと中途半端で終わってしまいます。

若い方は今から十分に計画し私のようにならないようにしっかりと実現に向け頑張っていたきたいものです。時間って「光陰矢のごとし」で直ぐにその時が来てしまうものです。またどのような人にも平等に与えられているのがこの時間です。自分の人生を良くも悪くもするのは自分自身なのです。今日からでも遅くありません。絵でも音楽でもスポーツでもプラモデルでも書道でも何でもいいのです。

先日実家に行った時に、母が写経に時間を費やしていることを聞きました。確かに母は書道が上手いと思いますが、まさか写経とはビックリした次第です。きっと考える事があったのだと思います。母が書いた作品を見て私もやってみようかなあとも思いました。何か心が落ち着くような平常心の世界に入っていける感じがしました。

2万時間は大きな数字ですがコツコツと取り組む事が重要であると思います。皆さんも何かには是非ともチャレンジして下さい。五木寛之が言うように「人間これという一つに打ちこんだら、驚くほどの事が出来る。」のです。

人生の中で成功体験しか経験した事がない人は、どのような事象に対しても成功体験を思い描いてこれまでと同じ考え方で進めるものです。これが一度でも苦い失敗を経験した人は、ある事象に対して少なくとも成功事例と失敗事例を思い浮かべて何らかの手段を考えてことを進めます。ここが重要なポイントだと思います。

また、物事の両局面を身をもって体験すると、より一方の出来事が倍以上の強さで感じられることとなります。人間は両極端の片方に位置した時は反対側の極端のことを考えることにより、次の打つべき一手を冷静に判断できます。それはあたかも振り子時計の振り子が両端で位置エネルギーが最大となって一瞬停止し、次の瞬間に運動エネルギーに変換して反対側に戻ろうとするために動き出そうとする現象に似ています。

人間如何なる場合でも両極端を経験し、なおかつそれをどのような場合にも役立てることが出来る冷静な心を持ちたいものです。モーツァルトは正にこの両極端の経験を生かしているからこそ、あのような素晴らしい音楽がかけるのです。才能はもちろん大前提にありますが、その基礎にこの対極するものがあつたのです。

したがって、私のような凡人は謙虚に物事に当たらなければ道が開ける訳がありません。要は偏った経験でなく幅広いことにチャレンジすることが大切なのです。

人生の中で成功体験しか経験した事がない人は、どのような事象に対しても成功体験を思い描いてこれまでと同じ考え方で進めるものです。これが一度でも苦い失敗を経験した人はある事象に対して少なくとも成功事例と失敗事例を思い浮かべて何らかの手段を考えてことを進めます。ここが重要なポイントだと思います。

また、物事の両局面を身をもって体験すると、より一方の出来事が倍以上の強さで感じられることとなります。人間は両極端の片方に位置した時は反対側の極端のことを考えることにより次の打つべき一手を冷静に判断できます。

それはあたかも振り子時計の振り子が両端で位置エネルギーが最大となって一瞬停止し、次の瞬間に運動エネルギーに変換して反対側に戻ろうとするために動き出そうとする現象に似ています。

人間如何なる場合でも両極端を経験し、なおかつそれをどのような場合にも役立てることが出来る冷静な心を持ちたいものです。モーツァルトは正にこの両極端の経験を生かしているからこそあのような素晴らしい音楽がかけるのです。才能はもちろん大前提にありますが、その基礎にこの対極するものがあつたのです。

であるからして、凡人は謙虚に物事に当たらなければ道が開ける訳がありません。要は偏った経験でなく幅広いことにチャレンジすることが大切なのです。

かなり昔のことになりますが、地下鉄を待っているときにホームと正対している側の壁に見つけた変わった広告宣伝「死んでからの生き方」について考えてみました。皆さんの中にもきっと見られた方がおられると思います。始めは何を訴えたい広告宣伝か分からなかったのですが、小さ

な字で書かれた内容を読んで訴えたい事が分かりました。

要は「臓器の提供意思を登録しましょう」と言うものでした。例え命が絶えてもその人の臓器が他の人に移植される事によってさらに生きるということです。確かに悪い事ではなく美しい事だと思います。

しかし何かしっくりしないのです。どうも歳をとると親から貰ったものは死んだら全て葬り去る事が生と死のけじめのような気がしてならないのです。全て祖先から永遠と受け継いで来たDNAの支配により今の自分の肉体がありDNAに書き込まれた情報により死という時期もほぼ決められていると勝手に決めつけています。

DNAの解明が進めば進むほどDNAに書き込まれた情報を操作し自然に反した人工的な論理により生命をコントロールするようになるでしょう。これが良いことか悪い事か判断できません。少しでも長生き出来て世のため人のためにその人生を捧げるのならばよいことかも知れませんが、ただ個人の命を延ばすための行為が良いことか分からないのです。

限られた人生であるからこそ一生懸命生きようとする意欲が湧き、人間は努力するのではないのでしょうか。それがDNAやその他の医療技術により限りなく長く生きられるようになった時に人間はどのようになるのでしょうか？なにかとても恐ろしいことが起きそうな気がします。

金持ちがあるいは世の中で権力を持っている人間だけがひょっとするとDNAを操作して長生きするようになるかもしれません。それは正しいことではありません。どんな時でも自然に従う事が正しいのです。偏った行為は駄目なのです。

なぜならば自然には必ず秩序があり人間には秩序がないからです。人間にあるのは欲だけです。ちょっと悲しい話しになってしまいました。困った人や弱い人を助けるのは強い人の仕事であり役目です。これだけをきちんと守ることが重要ではないかと思います。

今回の広告宣伝を見ながら今後死んだ時に自分の臓器を必要とする人に提供するかどうか考えて見たいと思います。しかし凡夫の体はコレステロールで侵されているのでそれでも大丈夫なのかどうか分かりません。我が愚妻や愚息は提供する意思を表明しています。素晴らしいことなのかかも知れませんが。凡夫はまだ決断がつかえません。皆さんもこの機会に死んでからの生き方について是非とも考えてください。

哲学に関して

「無用と用」、あるいは「不必要と必要」のように相対する事実は一見すると無用や不必要が悪いように受け取られますが、決してそうでないと思います。

なぜならばこの世の中の出来ごとは「0」や「1」のようなデジタル的な考え方で割り切れるのもでなく、全てが連続的につながっているアナログ的な世界で生じると考えるからです。

この連続性が基本的な考え方となっているアナログの世界の両端に「0」と「1」が位置付けられます。従って、どの点をとっても連続しているのですから簡単に「0」が良くて「1」が良くないというような結論を導くことはできないのです。

簡単な絵で書くと次のようになります。□-----□です。□の両端の点が「0」と「1」だと考えてください。ものごとの全てはこの線上で発生し、その結論が両端あるいはそのどちらかに近い線上の位置に落ち着くのです。

従って一見無用に見えるものであっても、それはそれなりに大きな意味があり、そこに至る過程に言葉で表現できないような重要なプロセスが隠されているのです。

良い例として人間のDNAがあげられます。このDNAを分析してみると、遺伝子配列のなかでどうしても理解のできない遺伝子（無駄と思われるような）の配列が全体の90%以上あるような話を聞いた事があります。

しかしこれらの遺伝子は、以前に役に立ったものあるいは今後非常に役に立つ可能性を秘めているものと思えるのです。今後の研究でこの辺はどんどん解明されて行くものと思われま

す。人生もこれと同じであると思われま

す。要は自分に素直に生きていけば自ずと何らかの形になり、結論付けられるものだと思います。無駄が無駄でなく不必要が必要になることがあり得るのです。

日々の生活の中で

涙というのは不思議なものでうれしい時も、悲しい時も、悔しい時も、心の琴線に触れた時も、何の理由もない時にも出るものです。即ち人間の感情の動きは全て涙を出す回路と連動するようになっているものと思われまます。

昔は本当の涙を流したような感じがしますが、今の時代の涙ってなにか真実と少しずれた要素によりコントロールされているような気がしてなりません。本当の涙って思いっきり涙を流した後はどのような場合でもサッパリとした清々しい気持ちになるのが普通だと思います。

しかし、今の時代は何故か涙も中途半端でやらせの感じがあります。余りにもある事実に対して脚色や演出が強すぎてしまっているのです。女性に例えるのであれば厚化粧をし過ぎて本来の美しさを失ってしまった女性とでもいうのでしょうか。

本人は泣いたつもりになっているのだが本当は泣いたことになっていない。やはり涙は本心で思いっきり泣く事が大切だと思います。低次元のメロドラマの産物による涙は確かに流れますが後々爽やかでないのです。やはりドラマであると分かっているからかも知れません。

人間いつでも素直であればどのような事が発生しても五感を通して感じたものに対してその通りに行動すればよいのであって、たとえそれが涙を流すことであれば思いっきり泣けばいいのです。

人間生まれて来る時は泣いて生まれて来るのに、死ぬ時は泣きません。ここにも一つの不思議があります。死ぬという事は五感を通して感じるものではないのかも知れません。変な事に興味を持っているこの頃です。

凡夫はは夢という言葉が大好きです。なぜか心が暖かくなりまた大きく膨らむような感じがします。さらに希望や光や明るさも感じられます。多分夢はプラス思考に働くのでこのような前向きな感覚が得られるのでしょう。

昔私が小学生の卒業記念集に書いた夢は「昼間は会社員として働き、夜はアマチュア無線で世界の人と話したい」と書いた記憶があります。今、思うとちょっと情けない感じです。でもあの時は本当にそうしたいと思っていた記憶が今も頭の片隅に残っています。

大人になった時に夢はと聞かれると、大きくまた実現しそうなことを言ってしまうのですが、夢に関しては大きさによる良し悪しはなく、小さくても明日に繋がりが心が和むものであればそれは夢と言って良いと思います。

昔の卒業記念集には、総理大臣や会社の社長、さピックで優勝するとかプロ野球選手になるとかいろいろな夢が書かれていましたが、あのころの皆の夢は実現したのでしょうか。

皆いまは還暦を迎える年齢になってしまっていますが！

これからの夢としては、自分の会社を作ることか若しくは本を出版すること、あるいはサントリーホールでピアノリサイタルを開くこととか、ウィーンフィルハーモニーを小澤征爾の代わりに指揮することです。どれも大き過ぎて実現しそうもないですが、明日に向かって頑張ります。夢とは人間にとって明日を生きたいと思わせる麻薬かもしれません。